



誰かに教えてもらったわけではなく、経験を重ねてたどり着いた名付けて「大吾工法」で、集まったみんなの力を借りて建てられた加藤さんの自宅。



森で暮らす

都会から森へ とらわれない生き方

「原始的な暮らしから文明に少しずつ近づいて、あたかも人類の歴史を辿っているような（笑）。最初は家もなかったし、森の開拓から始めたんです」。そんな「森の暮らし」を10年かけて作ってきた、加藤大吾さん。

本人が「第3の道」と呼ぶその暮らしは、過去に戻るでもなく、未来に進むでもない。現代文明の先に向かうのではなく、別の文明に向かっていくような、そんな感覚だという。自分で描いた未来に縛られるわけでもなく、その時々欲求に素直に従った結果が、現在の暮らしなのだ。

「森の中に住みたかっただけなんです。子供に一番良い刺激がある、土の感覚がある、そんな暮らしがしたかった。東京・新宿という都会暮らしの中で、実は4歳〜6歳の3年間だけは東京の奥多摩に住んでいたんです。その幼少時代の記憶なんですか、しばらく森のガイドもしていたんですが、森のスゴさや私たちが森に生かされていることは、頭でわかっていても身体ではわかってなかったんですね。知識はあっても、体感ではなかった」。

加藤さんにとって森の暮らしとは、森に学びながら、人間として成長していくことなのかもしれない。



アースコンシャス代表
ピースフルライフワーカー
加藤大吾さん
NPO法人都留環境フォーラム理事長も務め、トランジションタウン都留の発起人でもある。取材に訪れた記者に乗馬を進めてくれる、そんな気さくな人である。



1 かつての自宅。現在はゲストハウスとして活用しているそう。2 ヤギからはフレッシュなミルク、そしてチーズが。鶏は卵を産み、美味しい肉にもなる。3 馬力で石臼をひく。化石燃料に頼らない持続可能な農法として馬耕文化を復活させ、畑鉤きなども行っている。

特集 大地をつなぐ人

誰かに伝えたくなるストーリー

我々が今、つながりを取り戻さなければならない「母なる大地」。

そして、取り戻したつながりは、多くの同時代人、次なる世代にも、引き継いで行かなければならないもの。

食べる事、耕す事。生きるチカラの源である大地をつないでいく人々のストーリーは、例え名も知らぬ土地の

名も知らぬ人のものであったとしても、

思わず誰かに話したくなる、そんな輝きをもつ。



山梨県都留市の森に暮らし加藤大吾さんは、2009年より無農薬無肥料の田んぼで稲作を開始。三反の農地の使用権を得て、就農した。2010年には1反5畝の田んぼも購入した。



NPOの拠点もみんなで作り上げる。家づくりWSには毎回多くの人が集まり、実践的に大吾工法を学んでいく。



「大人になったらクジラになりたい!」きよしろうくと、火の扱いは大人顔負けの、そうくん(加藤さんの息子さん達)。畑で採れた新鮮野菜をお前に、ご機嫌の2人だ。

森で暮らす



(右)『地球と暮らそう～生態系の中に生きるという選択肢～』
加藤大吾 著(旅と冒険社刊) 定価¥1,000(税別)
(左)『地球と暮らそうII～豊か暮らす知恵と術～』
加藤大吾 著(旅と冒険社刊) 定価¥1,500(税別)
著者とその家族が都会から森に移住して5年目、10年目の節目に出版した2冊のシリーズは、「森の暮らし」を知る絶好の教科書だ。

1 サラダにしても美味しいラディッシュ。2 大豆は枝豆・煮豆・おから・きなこ・納豆・味噌・醤油と、日本の食生活には欠かせない。3 自家製の温室を作れば、冬でも新鮮な葉物野菜を手に入れられる。



都市II消費の文化 森II生産の文化

「我が家の子供達は、暗闇も平気だし、楽しめる強さがある。水も米も味噌もあるし、肉はその辺を走り回ってる(笑)。都会は消費の文化ですが、森の中は生産の文化なんです。なくなればまた作ればいいだけ。震災時には、森で暮らす強さを実感しました。だからこそ、震災支援にも力を入れました」。

森を切り開き、種を蒔くと面白いように芽が出て、やがて食べられるまでに成長した。「食べられるものは自分で手に入れられる」……その想いで、米や大豆、麦も作り始めた。鶏やヤギ、そして馬も飼いはじめた。そうこうしているうちに、知らぬ間に自給率が上がっていったのだという。ただ自分が楽しいからやっている。だから子供達に手伝いを強要することはしない。

「子供達はただの労働力ではない。農家の子供達が、農家はキツイ、農家になるのは嫌っていうのは、そんな意識を、子供の頃に焼きつけてしまっているから。我が家の子供達は、ゲームより羊やヒヨコと遊んだり、餌をあげたり、野菜を収穫する、リアルを楽しんでいる。今の暮らしを楽しめれば、将来もきっと楽しんでくれるでしょ」。

子供達は土に触れ、自然の恵みを感じることで、森とつながっているのだ。

エゴ優先の幸せのカタチ 森の暮らしを世界に発信

加藤さんは、「自分がやっていて楽しく、自分の未来に貢献できる」「社会や自然、地球に貢献できる」「組織や仲間にも貢献できる」という運営方針で、NPO法人都留環境フォーラムの活動も進めている。

「まずは自分が楽しいことを優先。エゴの中に真実が隠されている。エゴがなければ、最初のエネルギー源がないってこと。それが『貢献』につながる。次への原動力になっていく」。

人によっては、楽しいことは森の中だけではなく、海や砂漠にあるかもしれない、しかし加藤さんにとって楽しいことは、森にあったのだ。
「まずはやってみたらいい」と、加藤さんは付け加える。大工仕事に家づくり、田んぼや畑、NPO、さらには体験できる場所として多くの人の手を借りた「拠点」も完成し、加藤さんちとして動き始めている。

「森の暮らしを通じて得た知識や現実、幸せのカタチを、今度は世界へ伝えていきたい。最近ではやりたい事というより、(呼ばれてる)って感覚に近いかな」と加藤さんはいふ。そして、様々な場所や地域で、「呼ばれた」人たちが繋がり始め、地道ながらも力強い動きとなり、根付き始めている。